

2021年3月7日主日礼拝

大井バプテスト教会

説教題「主イエスと共に歩む道 ～祈り～」マタイ 16章 24～28節

主任牧師 加藤 誠

**「それから、弟子たちに言われた。『わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。』(マタイ福音書 16章 22～23節)。**

この主イエスの言葉は、ペトロたち弟子だけでなく、今日この礼拝に招き入れられた私たち一人ひとりにも語りかけられている言葉です。「主イエスと共に歩む道は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、主イエスに従うこと」。皆さんはこの御言葉をどのように聴かれているのでしょうか。

「自分を捨てる」とは、自分の我欲を捨てること。自分がやりたいこと、手に入れたいこと、こうなりたいという願いを捨てること。「自分の十字架を背負う」とは、主イエスがそうであったように、他者の罪(弱さ、愚かさ)を引き受けていくこと。

「自分の欲望をすべて捨てて、他者の罪を背負う」ということは簡単なことではないし、ほとんど不可能に近いのではないか…と思う道です。

金持ちの青年が主イエスから「あなたの財産をすべて売り払って、貧しい人々に施し、そしてわたしに従ってきなさい」と語りかけられた時、彼は顔を曇らせて、悲しみ、主イエスのもとから立ち去っていきました。「自分はそこまで隣人を愛し、神を愛する愛を持ち得ていないこと」を正直に認めたからでしょう。その点で彼は正直でした。わたしはどうでしょうか。この主イエスの厳しい招きの言葉にどう応答していく信仰を持ちえているのでしょうか。

レント(受難節)に入って、この主イエスの厳しい招きの言葉を思い巡らしながら、わたしが今たどり着いている結論。それはこういうものです。

「イエスさま、『今！捨てよ！そして他者の十字架を背負え！』と言われたなら、わたしはそれができていませんし、できない自分を認めざるを得ません。でも、なんとかイエスさまのあとをついていきたいのです。わたしの考え、わたしの感性、わたしの愛がどれほど貧しく、限界があり、日々、自分の周りの人たちを傷つけてしまっているか。わたしは、自分一人の力では生きていけないということをわたしは知っています。『自分を捨て、そして他者の十字架を背負うこと』を今すぐはできていなくても、イエスさまに従いながら、少しずつ自分にできることをしていきたいのです。イエスさま、この貧しい者を、あなたに従わせてください」。

つまり「すべてを捨てて」とは言えないとしても、日々少しずつ主イエスから信仰と愛と勇気を分けていただきながら歩んでいくこと。そこに加藤誠という人間が主イエスに従う道が刻まれていくのではないかと、そんなことを示されています。

同時にそのように主イエスと共に歩ませていただく道において、「祈り」がどれほど大切なものかを改めて受け取り直しています。「祈り」は神さまと主イエスに心の窓を開けてつながることです。私たちが祈っても祈らなくても、私たちを捕え

て離さない主イエスの恵みと愛が変わることはありません。が、私たちが主イエスとの対話を求め、心の窓を開けて正直に自分を語り、打ち明け、主イエスの信仰と愛と勇気を求めていく時、私たちの心の中に主イエスの命の言葉の光が射しこみ、照らされ、私たちの歩みは大きく変えられていくのです。

あけぼの幼稚園の子どもたちを見ていると、神さまとの「祈り」が子どもたち同士のつながり、関係をどれだけ豊かにしているかを教えられます。あけぼのでは、病気で休んだ友だちがいると、クラスでその友だちを覚えて祈りを合わせます。ですからその友だちが再び登園出来た時には走り寄って「もう治ったの？大丈夫？」と声をかけています。休んでいてもつながっているのです。それだけでなく先日病気で幼稚園を休んでいた子どものお母さんがこんな報告をしてくれたそうです。その子がふとんの中で手を組んで何やらつぶやいているので、何をしているんだろうと思ったら、バナナさんとかストロベリーさんという言葉が聞こえてきたので「お友だちのことをお祈りしていたの？」と尋ねると「うん」と教えてくれたとのこと。病気で休んでいる子もクラスの友だちのことを覚えて祈っている。クラスの子が病気の子を支える一方で、病気の子の祈りでクラスが支えられている。私たちが神さまに祈りでつながっていくとき、そのような祈り／祈られ、支え／支えられのつながりが生まれていくということを、子どもたちに深く教えられます。またあけぼのの子どもたちは、クラス皆で祈る時に、津波で家を流された人たちのことを祈ったり、コロナで苦しんでいる人たちのことを覚えて祈る祈りが、ずっと引き継がれています。もしかすると「そのような部屋の中の祈りがいったい何の役に立つのか？」と問う人がいるかもしれません。「目に見える効果、影響力」だけでものごとを計るなら、そのような祈りには意味がないと考える人がいるのかもしれませんが。しかし、神の国では違います。「このような小さな者」が尊ばれ、喜ばれる世界だからです。人間の目には役に立たないように見える「小さな祈り」を神さまは用いられ、つなげて、神さまのことを起こしていかれる。これが主イエスの教えてくださった信仰です。

私たちには、いろいろな「祈り」が与えられています。

ひとりで祈るだけでなく、礼拝や集会での祈り、二人三人での祈りなど。それぞれの恵みがあります。ひとりの祈りでなければ受けられない恵みもあれば、教会の交わりを通して信仰の友の祈りに触れることでいただく、さまざまなお励ましや慰めがあります。一番大切なことは、私たちが祈るときに、私たちの祈りに先立って私たちの罪と弱さ、愚かさを引き受けてくださっている主イエスが、私たちのために祈ってくださっているに事実深く気づかされていくことです。

コロナで今、その祈りの交わりが制限されていることはとてもつらいことですが、けれども今、それぞれの場所で主イエスから信仰と愛と勇気をいただきながらお互いに覚え合い祈っていきたいのです。そこに大井バプテスト教会の私たちが主イエスと共に歩み、主イエスに従う道が刻まれていくことを覚えながら。